

Title	外国につながる生徒による日本の高校での学びの意味づけと「成功」の変容： 中国人およびフィリピン人生徒を中心に
Sub Title	Meaning of Schooling and "Success" in Japanese High Schools among Immigrant Students : A Case Study of Chinese and Filipino Students
Author	坪谷, 美欧子(Tsuboya, Mioko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.6- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：在日外国人・マイノリティの現在：移住と定住をめぐる
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0006

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

外国につながる生徒による日本の高校での学びの意味づけと「成功」の変容

—中国人およびフィリピン人生徒を中心に—

Meaning of Schooling and “Success” in Japanese High Schools among Immigrant Students: A Case Study of Chinese and Filipino Students

坪谷 美欧子

1. 問題の所在

近年、国際移民たちによるトランスナショナルな家族戦略（出稼ぎ・国際結婚等）の中での、子どもや若者たちの問題がクローズアップされている。それにともない、かれらの母国での学びそして母国で身につけた知識や文化と、移住先の学校で教えられるそれとの関係への注目も高まっている。ただし日本においては日本人生徒の高校進学率が 98% であるのに対し、外国人生徒の高校進学率は 30~40% とも言われている（宮島 2013:16）。また高校進学を果たしても、学習困難や進路など多くの課題が指摘されている。本稿では外国につながる高校生、とりわけ来日間もない高校生たちが日本の高校で学ぶ上で抱える問題について考察を行いたい。かれらの課題としては日本語や教科学習の問題ももちろん大きいですが、より社会的なテーマとしては、母国と日本の学習スタイルの違い、学校における「成功」の意味など、「学校文化」に焦点を合わせる必要がある。これらの作業をとおして、移民の子どもの「社会化」の場である日本の学校がいかにも多様な背景を持つ生徒を受け入れ、（地域も含め）社会に送り出すかという社会的統合の問題の解決にもつながるだろう。

これまで、日本の「学校」という場合は、「一斉共同体主義」（恒吉 1996）、「単一文化・単一言語主義」（太田 2000）が主流であり、皆と一緒であることにより「平等」が実現されるという「日本的学校文化」（加藤・宮島 2005）という特徴がきわめて強い傾向にあった。日本語ということばの壁をクリアしなければ日本の学校での勉学はスムーズに進まないことは確かだが、それ以外にも日本の学校に通う外国人生徒にとって、慣れ親しんだ母国の社会や文化から、日本の、なかでも「学校」という文化的活動のシステムに「移行」しなければならず、そこには様々な矛盾がともなうことが指摘されている（趙 2010:50）。

趙衛国によると「隠れたカリキュラム」のなかの「暗黙的ルール」として、「いかに（日本の）教師を喜ばせるか」「いかに日本語を用い、学校の各教科の単位を取ることができるか」「どのように日本や他の国出身の生徒とのあいだに仲間関係を作れるか」などが挙げられている（趙 2010:50）。とくに、中国の学校のように成績至上主義で、学業という単一の評価軸で生徒と教師の関係が決定される社会と、日本のように「全人」育成に重点を置き、生活指導や

坪谷美欧子「外国につながる生徒による日本の高校での学びの意味づけと「成功」の変容—中国人およびフィリピン人生徒を中心に—

『三田社会学』第 20 号（2015 年 7 月）6-21 頁

部活指導に至るまで、さらには子どもの基本的な生活習慣の育成に関わる領域にまで関与するような社会とでは、自ずと学校に対する人々の考え方や態度は変わってくるだろう(趙 2010: 179)。

これに加えて、2002年度から始まる「ゆとり教育」や「総合的な学習の時間」といった、子どもたちの個性や創造性・自主性を重んじようとするポスト近代的な「教育改革」の流れは、本来であれば日本語に不自由していても生徒の個性や文化を発揮できる可能性を広げると考えられる。けれどもこうした近年の教育改革の流れは、むしろ「近代型」の学校文化を持つ社会からやって来た生徒たちにとっては馴染みがなく、かえって不利に働くこともあるという逆説的な現象も指摘されている(志水 2005: 44-45)。

本稿で検討する「学校文化」とは具体的には何を指すかを定義しておく必要がある。教示言語の違いによる苦勞、つまり生徒たちの日本語力が不十分であることは比較的目につきやすいため、これに対する支援等は様々な形で施される傾向にある。しかしながら「学校文化」とは「日本人の教師や子どもが〈当たり前〉としている」もの、つまり当該社会において「学校を取り巻くコミュニティの人間観や子ども観、発達観、教育観、よき人生のイメージなどの文化的意味体系」をもとに形成される(箕浦 2012: 96)。さらには、その社会の学校現場において、「日常の教師と生徒のかかわり方、生徒のほめ方や叱り方、生徒同士の関係の結び方、転校者の迎え方など」は、この当該コミュニティにおける「人間の在り方」に関する「文化的意味体系」と深く関わっている点にも注意が必要である(箕浦 2012: 96)。

そもそも「学校文化」を「批判」すること自体についての、問題も指摘されている。恒吉や太田が批判の対象としている「一斉共同体主義」や「単一文化・単一言語主義」などの観念も、学校や教師が日々の実践を「一斉共同体主義」や「単一文化・単一言語主義」として意識して指導に当たっているかは疑わしい。むしろ、教師の有する「観念」を相対化するようなアプローチがこれからの研究には必要だとする主張もみられる(垂見 2006: 97)。児島も日本の「学校文化を本質性や自明性を帯びた一枚岩の実態として想定」することについて、結局は外国人児童や生徒は「やる気がないとか、〇〇人は」というような同化主義的な見方と「たいへん似通った帰結をもたらす」危うさを指摘している(児島 2006: 204)。学校文化批判が「本質主義的」な前提に立って行われてしまえば、非常に逆説的な陥穽に落ちかねない。

以上のような視点は、日本の「学校文化」と外国につながる生徒について検討する上で極めて重要であろう。本稿ではこうした前提に立ちながら、トランスナショナルな家族戦略のなかで外国につながる生徒たちが日本の学校文化においてどのような部分で戸惑い、いかに対処しようとするのか、そしてかれらなりの意味づけの変容について、中国およびフィリピン出身生徒への聞き取り調査をもとに分析を試みたい。

本稿の調査の手続きは以下のとおりである。

本稿の調査のフィールドとしたのは、神奈川県立の総合学科の A 高等学校で、学力的には「中レベル」といえる。神奈川県「在県外国人等特別募集」設置校であるため、全校生徒約 700 名中、日本国籍を持つ者を含め、外国につながる生徒が 100 名ほど在籍している。日本国籍を

持つ生徒も含めおもな出身地は、中国とフィリピンを中心に、韓国、ベトナム、タイ、ネパール、ブラジル、ペルー、ドミニカ、メキシコ等である。また同校は1990年代より外国につながる生徒が多く在籍していたため、日本語習得や教科学習に関する取り出し、母語指導など、支援は他校と比較するとかなり多いといえる。またこうした生徒に対する教員たちの理解もおおむね高い。

調査期間は2008年および2011年～2012年で、来日1年～5年程度の生徒に対して行い、対象者の出身国の内訳は中国人10名、フィリピン人4名である。なお本調査はA校の「多文化教育コーディネーター」²⁾としての聞き取り調査を行ったもので、使用言語は日本語、英語、中国語である。調査項目は、来日の経緯、家族、日本語・母語の状況、高校生活、高校の志望動機、得意な科目・苦手な科目(母国と日本とでの変化)、母国と日本の学校の比較、進路希望などである。

2. 「日本的学校文化」への戸惑い

近年、国境を越えて形成される複雑な家族関係のなかで暮らす子どもたちの問題が指摘されているが(小林2013:161)、調査対象とした高校生たちも両親の仕事の関係で長期間離れて暮らしていたり、母親が日本人男性と結婚することで「連れ子」として来日するパターンが非常に目立っている。ほとんどの場合、親のほうに先に日本に来ており、多くの生徒がかなり長い期間(数年～十年程度)両親と離れて、母国の祖父母や親戚の家で育てられた経験を持つ。聞き取りを行った生徒たちは来日から1～5年と日も浅く、受験まで半年から2年程度の勉強で高校合格(ほとんどが「在県外国人等特別募集」)を成し遂げた、その意味では高校受験の「成功者」ともいえる。自身の来日については、「日本の方がすべてにおいて環境が良いので、自分の教育のため日本に来た」と説得され理解しているようだ。しかし、「親に来いと言われたから、日本に来ただけ」など、日本で暮らす意味についていまひとつリアリティがなく、高校進学を果たしたものの、日本で学ぶ目的もあいまいで勉学へのモチベーションが低い傾向も一部には見られる。とくに親と離れて暮らした時間が長い生徒にとっては、なかには来日を契機に新たに関係を築くことに困難を来している生徒もいる。

このように、かならずしも自発的な来日とはいえない事情を抱えながら日本で学ぶことになった、かれらにとって日本の学校とはどのように映るのか、以下ではインタビューの語りから、母国での学校と比較した日本の学校についてみていこう。

(1) 母国社会の学校での学び

中国、フィリピンともに、本国では大学受験が激化していること、大卒者の就職難などが社会問題化していることを背景に、中学や高校でも進学重視の教育が施されている。中国・フィリピンの教育事情は地域差も大きく、また近年では詰め込み教育を見直す動きも見られるが、聞き取り調査では中国人生徒のほとんどが教師から競争心をあおるような指導を受けていたこ

とがわかった。まず中国人生徒の語りを見てみよう。

A、B（中国、女子）

A：中国にいたときはテストの結果がいつも発表されていました。1 番から 100 番までです。

B：私の学校はその結果がメールで親のところまで届いていました。

C（中国、女子）

日本と中国の最大の違いは先生です。中国の先生は無理やり勉強をさせます。先生は「3 万人の大学生が卒業後就職できていない」という新聞記事を私たちに見せて、プレッシャーをかけるので、すごい緊迫感が走ります。私の学校の先生はまるで「ワンマン社長」のように仏頂面でした。

こうした環境から日本の中学や高校に入学した生徒たちにとっては、日本の学校の勉強量の少なさが驚きを持って受け止められている。この勉強量の少なさについての評価はあまり高いとはいえないことがわかる。

D（中国、女子）

日本の学校に最初に行ったとき、日本の学校は楽で自由だなと感じました。学校に行く時のバッグも空っぽで。中国のときは旅行カバンみたいに重かったから。でも、日本の学校はちょっと楽すぎで遊んでいる感じもします。日本社会はこんなに発達しているのに、学生はこんなに遊んでいて、とても不思議です。

E、F（フィリピン、女子）

E：日本のほうがすごい楽です。フィリピンでは小学校 1 年生から留年があります。

F：小学校でもテストは毎日なんですよ。順位もはっきりわかる。中間テストもあるし、それは毎日のテストとも違います。学期末のテストは教科書の cover to cover で、はじめから最後までの内容です。

E：途中の休み時間も遊びではなく、勉強しなきゃという感じです。

高校生自身が持つ高校で学ぶことに対する意味づけについて、本田由紀は日本と韓国の高校生とを比較して、日本の高校のほうがメリトクラシーにつながらないとのとらえ方が強いと述べている（本田 2005: 123）。日本の高校生は「進学知識」や「社会で役立つ知識」つまり「近代型能力」の修得の意味合いを見いだす生徒の割合は少なく、むしろ「自由な生活を楽しむところ」とみなされる度合いがはるかに大きい。また 11 カ国の在職青年への「高校にどのような意義があったか」についての調査結果でも、「専門的知識の取得」「職業的技能の取得」など

の意義を見いだす度合いは低い。その代わりに、「部活を通して友情を深める」「自由な時間を持つ」などが日本では非常に重視されている(本田 2005: 124-5)。

日本の高校では当然のこととして受け止められている「自由な時間を楽しむ」や部活等で「友情をはぐくむ」など、メリトクラシーの希薄さは海外から来日した生徒たちにとって、日本の学校に馴染むのを阻む要因であるともいえるだろう。

(2) 学習スタイルの相違

フィリピンであれば英語、中国であれば数学のような教科は日本に比べ進度が早いため、日本語をそれほど基盤としない科目では、じつは来日年数が短い生徒のほうが成績に有利に働いていることも事実である。そのため、これらの科目については日本で育った時間が長い子どもより、「直前来自型」の子どものほうが有利になるという(広崎 2007:230)。母国での既習事項については、かれらにとっては「貯金」のごとく、まず日本の高校受験において、そして入学後の学習においても「強み」となっている。

しかし、その「貯金」も時間の経過とともに減少してくるし、未習事項や未習科目についてはとたんに「日本語」が壁となって立ち足だかることになる。とくに中国人生徒にどのように勉強をしているかと聞くと、「テスト前はプリントをとにかく丸暗記している(死記硬背)」と答える者が多い。同校で日本語を指導する非常勤講師は、学内のイベント後にそれについての作文を書かせようとしたところ、「模範文を欲しい」と尋ねられたという。また提出された文章が形式的だったこともさらにその教師を驚かせたという(坪谷 2013: 145)。また日本語能力試験の最上級である N1 に合格しても日本語をうまく話せないなど、高校の試験や検定試験では測りきれない日本語の会話力や文章力向上の難しさもこの講師たちは指摘している(坪谷 2013: 145)。

母国の学校と比較して勉強量の少なさに不安を持ちながらも、授業や勉強の仕方やコツをうまく掴みきれないでいる外国につながる生徒の実態が窺える。このことを良く表す中国人生徒の語りがある。

D (中国、女子)

中国の学校では教科書通りに系統立てて、教科書を暗記してという勉強しかしてこなかったから、日本の学校のように「わからないところがあれば先生に聞きなさい」と言われても何がわからないのかわからないのです。だから、日本語の勉強方法にしても、なかなかつかめないんです。もっと日本語の授業の時間を増やしてほしいです。

G、H (中国、女子)

夏休みに何校が大学説明会に行ってそれをグループごとに発表するという課題がありました。「自由にまとめて良い」と言われてもどんな風にまとめれば良いのかわからない

し、私たち中国人3人のグループはすごく困っています。日本語もうまくないし、みんなの前で発表するのがすごく恥ずかしいです。

もちろん彼女らの口ぶりからは、「日本語ができればもっと上手に発表できたのに」という口惜しさも滲んでいたが、日本の学校での学習に潜む文化的な要因が、かれらにとってのハードルとなっていることがわかる。

この問題をもう一步深めて考察してみると、A高校に限った問題ではなく、日本語能力が不十分であればそれ以外の部分での「活躍」を求めようとする教員側の配慮が意識的にも無意識的なレベルでも作用しているのではないだろうか。これらの学習スタイルはじつは「ポスト近代的」な能力や学力を要求することを意味している。だが、これはかれらの出身国の学習スタイルとは異なっており、生徒たちのなかにはかえって当惑してしまう者もいると考えられる。そもそも発表やプレゼンテーションを行うにも、日本語力がベースになっていることも否めない。

3. 日本の「学校文化」への適応の諸相

母国と日本の学校文化のなかで行き来しながら、多くの生徒たちには日本の高校生活に自分なりに折り合いをつけようとして、適応への変化や戦略がみられていることもたしかである。とくに母国の友人、日本人生徒、同じ出身の生徒たち、自身の保護者など、さまざまな集団との関係から、生徒たちが日本の高校で学ぶことの意味づけについて知ることができる。以下では、引き続き聞き取り調査のデータをもとに、高校生活をうまく進めようとするための適応や戦略を整理してみたい。

(1) 日本人生徒の「模倣」による適応

A校で授業参観をしていると、とくに外国につながる生徒たちが受ける「取り出し」のクラスにおいて、母国では許されないような、授業中の不規則発言、おしゃべり、居眠り、教員に向かって「タメ口」を聞くこと、宿題や教材を忘れてくること、制服の「着崩し」、またそれほど多くはないが教師に対する反抗的な態度、などが散見される。これらは他校でもまたA高校の原学級における日本人生徒にも、見られる光景なので見落としがちではあるが、少なくとも母国の学校ではみられない行為であるという。

かれらは母国の学校ではこれらの行為は許されない行為との認識を持っていて、これらの態度について個別にインタビューで聞いてみると、「日本人はみんなそうしていますよ」「○○(母国)でなら許されませんよね」という返事が返ってくる。高校生活を送る上で日本人生徒と同じような外見や授業態度を模倣することは彼らにとって重要な意味があるようだ。それは日本の学校文化に外観的な部分からでも、慣れることが必要との認識があつてのこのようだ。またこのような行為は「取り出しクラス」というかれらだけの空間にだけ許された、日本

人生徒と一緒に原学級ではできない行為としても捉えられることもできよう。

(2) 「隠れたカリキュラム」への重要な気づき

勉強量の少なさや学習スタイルの違いに関しては上述のとおり不安や困惑を表していた生徒が多いが、聞き取りを進めていくと、クラスで行う課外活動、委員会活動、部活、ボランティア活動などに関しては、「楽しい」「母国にはなかった」などと積極的に評価する声も多い。また実践的な授業を複数選択できる総合学科である同校のカリキュラムというのも、生徒たちにとっては母国の学校ではなかった事柄が学べると好意的に捉えられている。生徒たちのなかには、これらの課外活動における熱心さや積極性を日本の学校では問われることに気付き始めている者もいる。日本の学校での勉強の方式では手こずっていた中国人生徒 A、B、C が日本の学校の別の面を評価している以下の語りを見てみよう。

A：中国の先生は成績しか見てくれません。でも日本は自主的な能力や課外活動、部活すべての部分で見られます。

B：いろいろな面で（日本のほうが）自分が成長できると思います。

C：中国の先生にとって生徒の性格などはどうでもよくて、ただ勉強ができる子が「良い子」なのです。日本の先生は、総合的に私たちのことを見てくれますよね。

日本の高校では「学業の優劣にかかわらず総合的に評価してくれる教師」「平等な教師」「(勉強だけでなく) 様々な面で自分が成長できる」などと、高校生活における平等性や総合的な部分に対する気づきである。前述の本田の指摘する日本の高校の「メリトクラシー」につながる部分をかかれらなりに肯定的にとらえている様子がみえてくる。母国ではテスト結果のみで判断され順位づけられることに慣れてしまっていたが、日本では日々の授業態度の積み重ねが重要であり、仮にテストがうまくいなくても別の方法でのカバーも可能だと認識が読み取れる。また母国と日本の高校で求められている「良い生徒像」の違いを認識し、自分を変化させることが大切であることに自覚的になっている生徒もみられた。この「気づき」とは、まさに日本の学校の「隠れたカリキュラム」を意識することで、日本の高校で求められている「成功」の違いに気づき、自分を変化させることが大事だと認識することである。またこうした適応は、教師からの関心や進学の情報を引き出すにも有利であることに意識的になっている生徒もいる。

さらにフィリピン人やブラジル人生徒のように、非漢字圏出身の生徒は漢字圏の出身者に比べ、日本語とくに漢字の学習において困難を抱えることがよく知られているが、かれらは日本人生徒と積極的にコミュニケーションをはかったり、作文や発表などでも感情表現に優れており、この点は同校の教師たちから高い評価を得ている(坪谷・小林 2013: 145)。こうした傾向

は、日本の「学校文化」のなかで、かれらが母国で身につけてきた価値観や学びがポジティブに働いている良い部分といえよう。日本語の指導にあたる教員によると、「助詞やことばの使い方に間違いがあっても、長くて良い文章、自分の気持ちを素直に書く」生徒が、フィリピンやブラジル人生徒に多く見られるという（坪谷・小林 2013: 145）。

ただし、記憶事項が多い科目や一つの解を求めることについては中国人生徒に対し高い評価が存在していることも確かである。やはり学校である以上、メリトクラティックな学校文化への親和性という意味では、中国人生徒のほうが有利に働いていることも事実である。とりわけ大学進学においてそれは大きな意味を持つだろう。それでも、日頃の授業態度や入試の面接などにおいては、「新学力観」のような部分で自己アピールができる能力も求められており、外国につながる生徒たちにとっては非常に複雑な「適応」を迫られていることがわかる。

（3）日本人生徒に対する「優位性」

外見や授業態度などでは日本人生徒を模倣しながらも、日本人生徒の考え方や行動が「幼い」「幼稚」だと指摘する生徒は少なくない。かれらのなかには母国で中学を卒業したり、なかには高校に通ったあと来日し高校受験をして入学してきた生徒もいるため、年齢的には日本人生徒より2~3年上の者も少なくない。そうしたことも影響しているかもしれないが、日本人生徒の精神的未熟さを指摘することで、自分の経験が勝っていること、文化的、また家庭的な背景でも日本人生徒には経験できない「苦勞」をしていることをポジティブにとらえようとしながら、自身の日本語力や勉強での不十分さをカバーしようとしていることのあらわれかもしれない。

E：日本では中学校に来て友達作って、「わー、わー」と廊下を走って追いかけてっこをしりして、遊ばなきゃいけなかったんですよ。それをしないと友達になれないし。

F：フィリピンだと中学に上がったら、みんなちょっと大人っぽい感じです。行動とか自分で責任を持つんですよ。

こうした「大人」の感覚を持つ「自分たち」と「日本人生徒」との間で境界線を引くことにより、高校における日本語能力や成績だけで評価されない、教師たちからの評価を超えたところにおける学校内の基準の読み替えを自ら作り出そうとしているのかもしれない。さらには校内で同国人どうし固まって行動することについてもそれが重要であることをかれらなりに解釈しようとしているとも考えられる。

（4）労働生活への適応

つづいて、かれらの「労働者」としての側面をみてみたい。外国につながる生徒の多くは日本でアルバイトに従事している。インタビューからかれらによるアルバイトへの意味づけを考

察してみたい。中国やフィリピンでは高校生がアルバイトをするということは非常に稀なことであるが、日本では高校生がアルバイトをすることは社会的にも広く容認されている。かれらの「道具的」な労働生活への適応から、移住労働者としてのかれらの存在をとらえることも必要である。大学や専門学校進学のための学費を貯金するということも、アルバイトの経験を積極的に受け止める理由づけとなっている。さらに、母国の高校生であればほとんど従事することのないアルバイトを通じてのスキルアップが価値ある行為であると捉える生徒もみられている。

E: 日本では(高校生が)アルバイトやっていますよね。

F: フィリピンはやらないよね。フィリピンだとアルバイトしていると「貧乏くさい。そんなにお金がないの?」という感じになっちゃう。でも日本は(そういう風に見られないから)いいと思う。

E: うん。いいと思う。

I, J (フィリピン、女子)

I: フィリピンでは大学に行っても仕事がない。だから、大学卒業してもどこか(海外に)行っちゃうんですよ。

J: 日本は高校生でアルバイトできるし、お金もらえるし。それがいいんですよ。

I: 日本の生活はさみしいですけど、どっちかっていったら日本に来たほうが...

J: 日本のほうがいろんなチャンスがある。(フィリピンでは)すごく仕事探すのが大変なんですよ。うちのバイト代のほうが大学卒業した人とか高校の先生の給料より高いんですよ。「フィリピンやばいじゃん」って思います。

K (中国、男子)

いま中華料理店でアルバイトしています。お母さんが長く働いている店で、お店の経営者の勧めで、私を社会勉強の一環として働かせることにしたいと思います。アルバイトの経験は、仕事のスキルが身についただけでなく、社会に出ていくための基礎となる部分や、社会との関わり方を勉強できています。

ただし、とくに1年生に多いのは時給の良いアルバイトをしたくても日本語が不自由なためになかなか採用されなかったり、親と同じ工場内で単純な軽作業に従事せざるをえない生徒など、上記のような「キャリア形成」にはつながらないようなアルバイトを続けている生徒もいる。なかにはアルバイトで稼いだお金を親の生活費として充てなければならないような場合もあり、日本に呼び寄せられたのは自分が働かされるためだ、との不満を持つことも少なくない。また、少数だが勉学への専念を理由にアルバイトを禁止されている者もいる。

このようにすべての生徒がアルバイトに従事し、ポジティブに受け止めていると結論づけることはできないものの、アルバイトに従事する青年たちにとっての「労働の世界への親近性」（児島 2006: 160）という意味において、特別な意味を持つことについて考える必要があるだろう。児島は日系ブラジル人の中学生の事例として、同年齢の日本人生徒との比較で「大人の世界」をすでに知っているという自身の優位性を保つと指摘している。一方、本稿の調査対象者は高校生であり、A校では日本人生徒の多くもアルバイトをしており、その点ではアルバイトはごくあたりまえのことと理解されており、日本人生徒に対する「優位性」の意味は薄れるだろう。ここでは日本人生徒との比較というより、むしろ母国の同世代の友人（なかには高校教師などの母国社会の「大人」）や母国の貨幣価値とを比較して、進学のための学費や生活費が稼げるという「優位性」に意義を見出しているのではないだろうか。さらには「社会勉強」や「キャリア形成」の機会として、「意味ある」行為であるとしてとらえようとしている者もいる点は興味深い。

4. 日本における「成功」の変容——進路選択への展望から

(1) 「やりたいこと」重視の進路選択

A高校では「在県外国人等特別募集」で入学する中国人生徒が近年増えたことにとともに、中国でも進学熱が非常に高いため、同校全体としては日本の大学や専門学校への進学を希望する者の増加が顕著になっている。とくに私立大学では、少子化と大学側の入学枠の拡大を背景にAO入試などの多様な選抜方法が、外国につながる生徒の進学を推し進めていることは確かだ。面接で自身の多様な文化的背景や移住の経験そのものを語ることは、自己アピールにもつながるという。家庭の経済状況が許せば、確実に広がっている大学進学の道は、ある意味高卒による就職よりも容易であるとも言える。高校卒業後の就職パターンはあまり多くはなく、高卒による正社員の給与がアルバイトに比べ手取り額としては低いのが現実で、卒業後アルバイト勤務という方向に流れる傾向も目立っているという。

やはり将来の進路についてのキャリア教育においても、日本の学校文化の影響は強いようである。聞き取りによると、生徒たちは高校のキャリア教育を受け、「好きなこと」や「興味があること」を反映した進路選択が可能であることに気づいている。たとえば中国人生徒のNのように、「日本ではいろいろな勉強の機会やルートがある」と、中国型の学業偏重の進路観から脱却をはかれた生徒も存在している。

N（中国、男子）

いま中国の友人はもう大学生になっているけど、中国では大学を卒業しても仕事がない人が多く、大変らしい。中国にいたときも自分は大学に行くとは思っていなかった。4年もかけて金もかかるし、有名大学を出ないと意味もないし……。有名大学は北京大学など

何校かしかないですが、地方出身の自分たちにはハードルが高くてとても入学できないです。自分で何か商売でもするのがよいのではないかと思っていました。

2年前に来日した頃は中国の「有名大学」に行くことに凝り固まっていたのですが、日本に来てからは、大学でやったことが仕事につながるということがわかったし、先生から興味を持っていることを選んで大学で勉強してよいのだということを知りました。

それで日本で大学に行こうと思えるようになりました。「日本ではいろいろな勉強の機会やルートがある」ことを先生から教えてもらい、自分の興味のある建築士を目指すためにどのような大学があるかということを知るようになりました。

一方、フィリピン人生徒に広く見られる傾向としては得意の英語を生かし、観光やサービス分野での就職を希望していることである。たとえば、キャビンアテンダント、シェフ、保育士、介護士などどちらかというと専門学校への進学を希望する生徒が多い。ただし進学希望のフィリピン人生徒たちからは、「卒業後はまずはアルバイト等で学費を稼いでから進学をしたい」「奨学金を取って大学に行きたい」などと、母国フィリピンでの進学観に依拠した進路プランを持ち合わせている者が多いが、日本での実現可能性は未知数である。その典型例をEとFの語りから見てみたい。

E: 私は高校卒業したら1年か2年働いて、まだ若いですから2年間考えて。とりあえず卒業したら働く。たぶん短大か専門学校に行きたい。英語を勉強したい。

——それを両親に話したことある？

F: 秘密です。とりあえず秘密です。

E: まだ決めてないから、決まったら親に言う。

——働くって言ってたけど、どんな仕事？

F: コンビニとか。大学卒業したら好きな職業を。

E: 二年でもいいから大学に行きたいと思っているんですよ。いまバイトしているからそのお金で大学に行きたい。英語を勉強したり、ファッションも勉強したいな。金もうかるような。いまダンスやっているけど、ダンスだけだとあまり金儲からないんだよね。

(2) 教師・保護者とのほざまで

これらの生徒たちの希望に対してかれらの保護者たちはどのような反応を示しているのだろうか。教育についての親の関与については、一般的に長時間労働や小さい子どもの育児に追われている場合が多く、子どもの高校での勉学や進路に関して強い関心を持つ保護者はあまり多くなく、「自分で決めなさい」という姿勢が目立っている。聞き取りした生徒のなかには、日本に長年住んでいるにもかかわらず学校からの書類をあまり読まないという保護者もいた。時間的にも経済的にもあまり子どもの勉強や進路に気を配る余裕はない保護者の姿が窺える。

ただ、経済力に多少余裕があり進学に対して熱心な親であれば日本の大学進学を子に強く望む場合が多い。また専門学校を志望する生徒も少なくないが、学費が高い割に、デザイン、美容、料理など母国での職業威信が低い専門の場合には、保護者の理解を得られない分野も多い。これらの「就職に直接役に立たない」分野への進学を子が志望した場合、親たちは強い拒絶の態度を示すことがある。また教師や保育士といった日本では比較的安定した職業と捉えられていても、母国において職業威信の低い職業への抵抗感もかなり強いようだ。

父母ともに忙しく働き、自身も土日をアルバイトに充てる中国人女子生徒の L と M は、進路に対しての保護者の関わり方が十分でないと言っている。

L、M（中国、女子）

L：専門学校に行きたいです。美容関係の。

M：そう、専門学校だね。大学の4年間は長すぎるよ。時間もそうだけど…。

L：学費もね。

M：学費が高いよね。だけど大学だと勉強って、いまの高校の勉強と変わらないよね。だからつまらないと思うんだ。だからやっぱり自分が好きな専門の、専門学校に行くのいいと思う。

—そのあとは美容関係に進みたいの？

M：うん。大学にはどうせ入れないだろうし。

—そのことを両親に話した？

M：話した。

—何て言っていた？

M：自分で学費を稼げて…。

（中略）

L：中国の親は三者面談とか好きではないですね。

M：そう。嫌いだよ。だって、日本人のお母さんなら子どものためを思って、いろいろと手助けするでしょ？

L：そう。子どもを助け、アドバイスも言いますよね。私は中国人の両親に比べて、日本人の両親に良い印象を持っています。私が（日本の）中学の時も、日本人のお父さんやお母さんはすごく熱心に三者面談に来ていました。でも私たちは全部自分で決めないといけないのです。

M：そう。何でも自分の意見で決める。日本に来てからすべてそうです。

もちろんこうした進路をめぐる親子間のギャップは日本人生徒にも共通する問題である。ただし、外国人生徒が日本人の生徒と大きく異なる点は、まず高校卒業後の進路を考える際に前提となる知識がなく、日本で多様な背景を持ちながら活躍する「モデル」³⁾もそれほど多く

なく、さらに親に相談することも難しい状況であり、日本人以上に多様な進路指導のニーズを抱えているといえる。本稿のテーマに即して言えば、日本での子どもの進路に対する関わり方について、移住者の保護者たちが母国の方法しか知らないということは一層不利に働くことも考えられる⁴⁾。

いずれにせよ、進路選択に関しては教師からの情報提供、精神的な励まし、また親からの理解や経済的支援を得ることは不可欠であり、外国につながる生徒にとっては大きな課題となっていることがわかる。日本の学校の教師が勧める「自分のやりたいことを見つける」「好きなことを職業にする」というキャリア観を、生徒はある程度受け入れているとみられる。ただしこれも保護者を説得できないと生徒たちは板挟みになることもあるだろう。外国につながる生徒たちの保護者が抱く母国における「良い大学」、「良い収入」を得られる職業につながる「良い進路選択」や「良い人生観」をめぐって、ここでも文化の違いが左右しているように思われる。

5. むすびにかえて

本稿はトランスナショナルな家族戦略のなかの外国人生徒について、とくに日本の文化的活動システムへの移行過程にある生徒に対する理解や支援の観点から論じてきた。移民の子どもの「社会化」の場である日本の学校においては、一方で外国につながる生徒をいかに日本の学校が受け入れ、生かし、社会に送り出すかという「社会的統合」の課題も孕んでいる。

日本社会全体に存在する学力観、教育観、発達観、さらには進路観を反映した学校という場で、さらには適格者主義の入試という学力別に振り分けられた高校というローカルな空間において、外国につながる生徒個人たちへ与える文化的な影響について考察してきた。そこでは生徒たちが日本的な学校文化に適應するという文化決定論的に論じるだけでは決して十分ではなく、かれらがいかに生き抜こうとし、ときに戦略的に適應しているか、またそれによる結果の意味や帰結について分析することが求められている。

聞き取りを進めていくなかで、「もっと日本語の授業を増やしてほしい」「もう少し進度を速めて欲しい」という声が生徒からも聞かれるようになった。かれらのこうした勉学に対する意欲的な姿勢はA高校の教師たちからも好意的にとらえられており、学校側としてもその対応に取り組んでいる。ただし、日本語力や勉強の仕方などでうまく適應できない場合には、日本の学校のやり方すなわち「教師が好む生徒像」にいかにか合わせられるかという文化的基準が恣意的に作用することも考えられる。また「やはり日本にいたのだから日本語力さえ向上させればよい」という教員たちの認識が強くなりすぎると、A校のように多くの外国につながる生徒を抱え教師たちからの理解も高く、生徒たちの母語保持のための授業を持ちながらも、無意識のうちに「日本語モノリンガリズム」を推し進める流れを作ってしまう懸念もある。

母国で慣れ親しんだ「近代型」の学習方法からの転換には手こずったり、不安を持ったりするものの、相対的にみれば日本の高校の「新学力観的」な評価のありかたは外国につながる生

徒たちに新たな価値づけをもたらすともいえる。また生徒自身たちからのこうした部分に対する評価も低くない。ただし学校である限り、また進学を見据えればなおさらだが、いわゆる「近代型」の学力観がまったく意味をなさないわけでもない。一方では、自分の特性をアピールするというような自発性が求められる場面もある。したがって、かれらの学校での「成功」はこうした「ダブルスタンダード」をうまく取り込めるかにかかっているのかもしれない。

かれらの語りからは、道具的に日本の学校生活やアルバイトという労働生活への適応を行っているようにも見える。しかしながら、ときに母国の価値観に準拠しながら生きる高校生たちの姿も浮き彫りになった。一見、トランスナショナルに見える家族戦略で来日した子どもたちとはいえ、かれらは自由に多国籍企業を渡り歩くような「スーパーエリート」の子どもたちではない。だからこそこのような学習・労働生活の面での日本社会への適応についても「戦略」を選択し駆使しているとも考えられる。

では日本の教育現場における「ゆとり教育」の見直しや「道徳」の教科化などの近年の「揺り戻し」の動きは、外国につながる子どもの学業達成にいかなる影響を及ぼすのだろうか。以上の議論を総合して鑑みると、日本語や教科学習のみならず、ダブルスタンダードともいえる複雑な学校文化への適応が求められる場もあることから、外国につながる生徒たちにとっての学校における困難さは容易には解消されないことが予測される。外国につながる子どもを包摂しうる学力観や学力評価のあり方をいま一度検討する必要があるだろう。

〔謝辞〕本稿作成にあたっては、2014年度 三田社会学会大会 シンポジウム企画「在日外国人・マイノリティの現在——移住と定住をめぐる」（2014年7月5日）でのディスカッションが大いに参考になった。記して感謝申し上げたい。

【註】

- 1) 児島は学校文化批判については、①「学校文化を完成された所与の実体ではなく、つねに進行中のプロセスとしてとらえること」②「学校文化をそれぞれ固有な立場や利害をもつ行為者が意味をめぐってせめぎ合う闘争の場としてとらえること」が重要であると主張している（児島 2006: 205）。
- 2) 神奈川県立高校における多文化教育コーディネーター事業とは、神奈川県教育委員会と「多文化共生教育ネットワークかながわ（ME-net）」の協働事業で、対象校である神奈川県立高等学校に対し外国につながる生徒が抱えるニーズに応じて、必要なサポートが可能な人材を派遣し日本語や教科の学習支援、母語による支援等にあたるものである。同事業は2007年度から開始され、2014年度には16校で実施されている。
- 3) 全体的な傾向として生徒たちの親族も日本では単純労働に従事せざるをえない傾向が強いため、多文化な背景を持ちながら日本社会で生きることについての「モデル」の不在の問題は深刻である（田房 2005;

坪谷 2007)。

- 4) ポスト近代社会における教育においては、子どもの学校における成功やその後の教育達成には、本人の能力と努力といったメリトクラティックな要因よりも、「ペアレントクラシー (parentocracy)」と呼ばれる、それらの獲得を可能にしやすいするための親の持つ知識や教育に対する熱心さがますます重要になってきている(中西 2012:100)。

【文献】

- 広崎純子.2007.「進学多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択——支援活動の取り組みを通じての変容過程」『教育社会学研究』80, pp.227-245.
- 本田由紀.2005.『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版.
- 加藤恵美・宮島喬.2005.「ニューカマー外国人の教育機会と高校進学——東海地方A中学校の<外国人指導>の観察にもとづいて」『応用社会学研究』47, pp.1-12.
- 小林宏美.2013.「国境を越えて形成される家族関係——日本語を母語としない生徒への聞き取り調査から」坪谷美欧子・小林宏美.2013.『人権と多文化共生の高校——外国につながる生徒たちとA高校の実践』明石書店, pp.158-171.
- 児島明.2006.『ニューカマーの子どもと学校文化——日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』頸草書房.
- 田房由起子.2005.「子どもたちの教育におけるモデルの不在——ベトナム出身者を中心に」宮島喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育——不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会, pp.155-169.
- 坪谷美欧子.2007.「外国人の子どもたちの進学と将来像——郊外団地におけるサポート・ネットワークの視点から——」『外国人児童・生徒の就学問題の家族的背景と就学支援ネットワークの研究』科学研究費研究成果報告書, pp.45-59.
- 箕浦康子.2012.「「異文化間教育」研究という営為について2、3の考察——パラダイムと文化概念をめぐって——」『異文化間教育』36, pp.89-104.
- 宮島喬.2013.「外国人の子どもにみる三重の剥奪状態」『大原社会問題研究所雑誌』657, pp.3-18.
- 中西祐子.2012.「教育におけるジェンダーとペアレントクラシー——親が娘と息子にかかる教育期待の違い」『公正な社会とは——教育、ジェンダー、エスニシティの視点から』人文書院, pp.100-117.
- 太田晴雄.2000.『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
- 志水宏吉.2005.「学校文化を書く——フィールド・プレーヤーとして」秋田喜美代・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソロジー——学校参加型マインドへのいざない』東京大学出版会, pp.37-49.
- 垂見直樹.2006.「日本における「外国人児童生徒教育」の再検討——「学校文化批判」以降の研究の展望と課題」『国際教育文化研究』6, pp.93-102.
- 坪谷美欧子・小林宏美.2013.『人権と多文化共生の高校——外国につながる生徒たちとA高校の実践』明石書店.

- 恒吉僚子.1996.「多文化共存時代の日本の学校文化」堀尾輝久他編『学校文化という磁場』柏書房, pp.215-240.
- 趙衛国.2010.『中国系ニューカマー高校生の異文化適応——文化的アイデンティティ形成との関連から』御茶ノ水書房.

(つばや みおこ 横浜市立大学)